

花の咲く前

小川未明

青空文庫

赤い牛乳屋の車が、ガラ、ガラと家の前を走っていききました。幸吉は、春の日の光を浴びた、その鮮やかな赤い色が、いま塗りたてたばかりのような気がしました。それから、もう一つ気のついたことは、この車がいつてしまつてからまもなく、カチ、カチという拍子木の音がきこえたことです。昨日もそうであつたし、一昨日もそうであつたよ
うな気がするのです。

「不思議だなあ、牛乳屋の車と、紙芝居のおじさんと、どうして、いつもいつしよにくるのだらうな。」と、ブリキ屋の店から、外を見ていた幸吉は、思つたのでした。紙芝居は、今日も、赤トラのつづきをやるにきまつています。赤トラの話は、なかなか長編なんでした。おじさんはじめ、子供たちは、みんな赤トラを悪いねこだといつていましたけれど、幸吉は、心の中で赤トラに同情してしました。なぜなら、もとをいえば人間が悪いからです。三びきの子を産むと、一びきは、近所の子供が追いかけて、どぶの中へ落とし、一びきは、だれかが連れていつてしまつたし、もう一びき

は、車くるまに足をひかれたので、母ははねこは、そのたびに悲かなしんで気が狂くるいそうになり、ついに仕返しかえしをしようと決けつ心しんするようになりました。赤あかトラは人ひとの家うちへ入り込こんで、はじめのうちには、金魚きんぎょをとったり、カナリヤを食たべたり、お膳ぜんについているお魚さかなをさらったりしたくらいのものですが、だんだんいたずらが募つつて、赤あかん坊ぼうをひつかいたり、お嬢じょうさんの手て提げを失なくしたり、取とり返かえしのつかないことをするようにしました。しまいには、「赤あかトラ」と、きくと、みんなが震ふるえあがるようになりました。

中なかには、槍やりや、鉄砲てつぽうを用意よういしておいて、きたら退治たいじしてやろうと待まちかまえているものもありましたが、神通力じんずうりきを得えました赤あかトラは、なかなか人にんげん間の目めには入はいりませんでした。

いつ忍しのび込こんできて、いつそんないたずらをするかわからないので、まったく悪魔あくまのしわざとしか思おもわれなくなりました。町まちの人ひとたちは、夜よるになると心配しんぱいでろくろく安眠あんみんはできなかつたのです。

ここにK技師ケーぎしという、若わかい発はつ明めい家かがあつて、赤あかトラの話をきくと、たいそう腹はらを立てました。

「世間せけんを騒さわがせる悪いねこだ。いかほどの神通力じんずうりきがあるにせよ、科学かがくの力ちからにはかなうま

い。私が退治してやろう。」と、電気を応用して、いよいよ、赤トラと勝負を決することになったのです。

「ここまででは、幸吉が見た、話のあらましでありました。

「きようは、どうなるだろうか？」

彼は家にじつとしていられます。ちようど叔父さんが、店にいなかったので、幸吉は、酒屋の前の空き地の方へ走っていきました。

二

子供たちは、空き地に積んである砂利の上へ登ったり、空き箱の上にすわったりして、紙芝居のおじさんを取り巻いていました。自転車の上の小さな箱の舞台の中には、見覚えのある赤トラの絵が出ていました。七、八人も子供があめを買わなければ、おじさんは、説明をはじめないのが常でありました。

「まだはじめないかなあ。」と、待ちくたびれて、いつている子供もありました。自転車で乗って、そばを通りかけた小僧が、わざわざ自転車を止めて、子供たちの

中^{なか}にまじって、おじさんの説明^{せつめい}をきこうとしているのも見^み受けられます。

茶^{ちやいろ}色の古^{ふる}びた帽^{ぼうし}子を斜^{なな}めにかぶった、口^{くち}ひげのあるおじさんは、なんとなくずるそう
な目^めつきをして、自^{じぶん}分のまわりに立^たっている子供^{こども}たちの顔^{かお}を見^みまわしました。そして、心^{こころ}
の中^{なか}で、いつもくる子供^{こども}たちがみんな集^{あつ}まったかと、一^{ひとり}人^{ひとり}の顔^{かお}をしらべているように
も見^みられました。おじさんは、いつも買^かってくれる子供^{こども}の顔^{かお}は、よく覚^{おぼ}えているのでし
う。そして、その中^{なか}に幸^{こうきち}吉^{きち}が立^たっていると、おじさんの、そのずるそうな目^めつきは幸^{こうきち}
吉^{きち}の顔^{かお}の上^{うえ}に止^とまりました。おじさんは、幸^{こうきち}吉^{きち}にさも皮^{ひにく}肉^{にく}そうに、

「おまえ、このごろ買^かわないな。」といいました。幸^{こうきち}吉^{きち}が、いつも汚^{きたな}らしいふうをして
いたからでもありません。また、めつたにあめを買^かわないので、紙^{かみしばい}芝^{しばい}居^いのおじさん
とつて、けつしていい得^{とくい}意^いでなかつたのも事^{じじつ}実^{じつ}です。

しかし、幸^{こうきち}吉^{きち}は、みんなの前^{まえ}で、こんなことをいわれていい気^き持^{もち}ちはしませんでした。
彼^{かれ}は、だまって、ただ顔^{かお}を真^まっ赤^かにしているには、もつと勇^{ゆうき}気^きがありました。また、そん
なことをいわれる理^{りゆう}由^{ゆう}もないように感^{かん}じました。彼^{かれ}は、おじさんに向^むかって、
「買^かいたくないから、買^かわないのだよ。」と、きつぱりといいました。彼^{かれ}は、すくなくも
侮^{ぶじやく}辱^{らく}に對^{たい}する仕^{しかえ}返^えしをしたように、小^{ちい}さな肩^{かた}をぐつと上^あげたのです。

「ふん。」と、おじさんは、いったきりで、あつちを向いてしまいました。

「そんなこと、どうでもいいから、早くおはじめよ。」と、一人の子供が叫びました。

「もうすこし待ちな、いまはじめるから。」と、おじさんは、お客の気を損じまいとしました。

幸吉は、いつまでも立つていてお話をきこうとはしませんでした。独り、みんなからはなれて、あちらへ歩いていきました。彼の心の中は、なんとなくさびしかつたのです。

黒い常磐木の林があつた、その下へきました。じきに花の咲く季節だったけれど、ここだけは、まだ冬が残っているように風が冷たかつたのです。彼は、この冷たい風が、かえつて、哀しい自分の胸にしみるように、いつまでもここにいて、風に吹かれていたい気持ちがありました。足音がしたので振り向くと、こちらへ駆けてくる女の子の赤いたもが見えました。

「幸吉さん、早くいらつしやいよ。私お金を持つているわ。」と、日ごろから親しいみつ子さんが、いいました。みつ子のお父さんは、大きな会社に勤めているとかで、みつ子は、いつも幸福そうでした。けれど、幸吉には、そのことが、なんの関係もなかつたのです。

「みつ子さんが、きけばいいじやないか。」と、幸吉は、白い目で、みつ子の顔を見ました。

「あんたもいらつしやいよ。」

みつ子は、独りはなれていった幸吉を心の中で気の毒に思ったので、追いかけてきたのです。

あちらでは、おじさんのおもしろそうに声色を使っているのが、きかれました。

「僕、きかなくていいんだよ。」

幸吉は、このうえ、自分を連れていこうとするのは、自分を降伏させるものだと思つたので、つい怒り声を出したが、しまいそこにいたたまらなくなって、またあてもなく駆け出していきました。

三

幸吉が店へ帰ると、仕事場に立っていた叔父さんは、さも手柄顔をして、「ジャツクの奴、うまく物置へ入れて閉めてしまった。いまに犬殺しがきたら引き渡

してくれるのだ。「といいました。幸吉は、これをきくと、どきつとしました。なにか真つ黒な手で胸を押さえつけられたような気味悪さを感じました。「赤トラ」の話に強く心を惹かれたのも、このジャックという年老いた不幸の野犬のことが、たえず頭の中にあつたからでした。叔父は、どういものかジャックを心から憎んでいたのでした。それにはたいした理由があるのでなく、ただこの哀れな黒い毛の汚れた老犬を見ると、むらむらと憎くなるというふうでした。幸吉は、それを怖ろしいことのように思いました。幸吉は、あるときには、たまりかねて、叔父さんの顔を見上げながら、

「叔父さん、ジャックをかわいがつておやりよ。かわいそうじゃないか。」といいました。

「どういものか、あいつはきらいでな。ひどいめにあわせてくれなけりや。」と、叔父は、金づちを手握つて、きたら投げつける身構えをしていました。

「なにも悪いことをしないじゃないか。」と、幸吉は、つくづく叔父さんの顔を見て、どうしてこの哀れな犬だけに無情なことをするのだろう、ほかの犬には、やさしくしてやるのにも思つたのでした。

「あいつが、植木鉢に小便をかけたし、いつかくつが片方失くなったのも、きつとあいつがどこかへくわえていったのだ。」と、叔父は、答えたが、なんの理由もつけず

にいじめるのは、自分でも気がとがめるからだ、幸吉には、思われました。

しかし、いまはそんなときでない。ジャックが物置の中に入れて、戸を閉められたときいては、じつとしてはいられなかつたのです。

「なんで物置の中へ入つたのだろうな。」と、幸吉は、あの年を取つていてもりこうで、敏捷な犬がと不思議に思いました。

「犬殺しに追われてきたんだ。逃げ場がないので、物置の中へ隠れたのだよ。」と、叔父は、ところもあるうに、おれの家のお置の中へ隠れたのが、あいつの運の尽きだつたと、せせら笑いをしていました。幸吉は、またかわいそうに、自分が平常ジャックをかわいがつてやるものだから、助けてくれると思つて、家の物置にきて隠れたのだ。もし、このまま犬殺しに引き渡してしまつたら、ジャックはどんなに自分をうらむかしれない。よし、助けてやろうと、決心しました。

あちらで、しきりに犬の遠ぼえをする声がありました。犬殺しが近づいてきたのを警戒して、仲間に知らせているのです。幸吉は、すぐに裏手へまわりました。彼の足音をききつけると、暗い物置の中から、訴えるように、すすりなく犬の悲鳴がしました。

「ジャック！ 早く遠くへ逃げろ。」

幸吉が、戸を開けると、黒犬は、弾丸のように飛び出して、叔父さんが、仕事をしている店先のブリキ板を蹴散らして、路次を抜けて原っぱの方へ逃げていったのです。「ばかやろう、なんで犬を出したのだ！」と、叔父さんは、幸吉の頭をなぐろうとしました。幸吉は、手の下をくぐって、自分も犬の後を追って逃げたのであります。

しかし、ジャックの姿は、どこにも見えませんでした。彼は、町を離れたさびしい原っぱの中に立って、口笛を鳴らしました。どこへ行ってしまったか、ジャックはやつてきませんでした。

いつも、こうして口笛を吹けば、遠くからききつけて、駆けてきたものです。彼は、家無しのジャックを思うと、心の中が悲しかったのでした。

幸吉は、しばらく茫然として、考えながら立っていました。あちらに見える高い煙突は、町のお湯屋か、それとも工場の煙突らしく、黒い煙が早春の乳色の空へ、へびのようにながら上がっていました。

「あ、田舎の家へ帰りたいな。」

幸吉は、自分には、帰る家があるのだと思いました。そう思うと、しみじみと故郷

の村が恋しくなりました。

四

ジャックは、森の中へ深く入ってゆきました。彼の後からは、びつこの白犬と、耳の垂れた斑犬がついていきました。そして、たがいにジャックの右になり、左になりして、ジャックの身を護衛するように注意深く先方を見つめていました。すぎや、松の木の上のしげった森の中にはとどころどころ日の光が、にじのごとく洩れて下のさきの葉を明るく照らしています。ここまでは彼を追ってくるものはありません。野犬の一群は、ジャックを中心に、自分たちの生活を営むことにしました。彼らは、どこへいくにも一塊となつて、いつでも敵に当たる用意をしていました。犬たちの間にも、戦つて弱いものは、強いものに絶対に従うというおきてがあつて、夜になると、どこかの飼犬が、畜犬票をチャラチャラと鳴らしながら、牛の骨や、パンくずなどをくわえて、彼らの機嫌を取るべく森の中へ持ち運ぶのもありました。

ある日、幸吉は、ジャックのことを思い出しました。

「ジャックは、どうしたろうか。」

往來へ出ると、紫色の美しい着物をきたみつ子が遊んでいました。日の光の中に、ぱつと花が咲いたように、道の上までがまぶしかつたのです。

「みつ子さん、赤トラはどうなった？」

幸吉は、このごろ、カチカチという拍子木の音をきいても、いくことがなかったのです。

「とうとうK技師に、電気で殺されちゃったのよ。」

「かわいいそうだね。」

「だって、赤ん坊をひつかいたり、人間にかみついたりするんですもの、しかたがないわ。」

「どこかへゆくのか？」

幸吉は、みつ子にたずねました。

「叔母さんがいらして、お母さんと三人でお買い物に行くの。幸吉さんにお土産を買ってきてあげるわね。」と、みつ子は、ぱつちりとした黒い目で幸吉を見ました。

「みつ子さん、もう僕、晩にいないかもしれない。」と、幸吉は、じつとみつ子の顔を

見返すと、みつ子も、ちよつと驚いた顔つきをしたが、すぐにいきいきと笑つて、「そんなことうそよ、だましたつて知つてゐるわ。」と、くるりと彼方を向いて、駆け出していききました。げたについてゐる鈴の音が、リンリンと幸吉の耳にきこえました。軽気球の上がつてゐるのであるう、遠い町の空はかすんでいました。こうして耳をすますと、大海原の波音のように、あるいは、かすかな子守唄のように、都会のうめきが、穏やかな真昼の空気を伝つてくるのです。幸吉は、原っぱへいったが、原っぱには、だれも遊んでいませんでした。丘の木立は、みんなうす紅く色づいていました。あちらの高い煙突からは、今日も黒い煙が上つていました。幸吉は、その煙を見て、明日も、明後日もまたこのように立ち上ることであろうと思つたのです。

まだ霜で枯れたままになつてゐる、草株の上へ腰を下ろすと、黄色な小さいちようが、風に吹かれて目の前を飛んでいききました。幸吉は、年ちゃんや、正ちゃんたちと、ボールを投げて遊んだ去年の秋の日のことを思い出してました。

このとき、突然後方から、飛びついて幸吉の頭を抱えたものがあります。

「あつ、ジャックだ！」

彼は、びつくりしたよりは、踊り上がったほど喜びました。そして、ジャックと原っぱ

で相撲を取りました。

「ジャック、どこにいたんだい。僕、晩に田舎へ帰るんだ、もうあえないのだけ。」
 知らずに熱い涙が、目の中からわいて出ました。ジャックは、いったことがわかるのか、
 幸吉の涙にぬれた顔を舌でぺろぺろとなめています。

遠くで、ほかの犬のなき声がしました。すると、ジャックは、急に幸吉を振り捨て、
 あちらへ走っていつてしまいました。

五

がんこの叔父さんが、たいそう機嫌がよくジャックの頭をなでています。そのそばに紫
 色の長いもの着物をきたみつさんが立つて、見て笑っていました。あちらで、
 拍子木の音がすると、年ちゃんや、正ちゃんが、

「紙芝居のおじさんがきたよ。」と、駆け出していきました。

幸吉は、自分もいこうかと思つたとき、ふいにガタンと体が揺れたので、眠りから覚
 めたのです。彼は、田舎行きの汽車に乗つて、夢を見ていたのです。

昨夜、叔父さんが、荷物を持って、停車場まで送ってくれました。夜が明けると、汽車は、広々とした平野の中を走っていました。車中には、眠そうな顔をした男や女が乗っていました。窓から外を見ると、あたりの田圃や、雑木林は、まだ冬枯れのしたままであつて、すこしも春の気分が漂っていません。山々には、雪が真っ白に光っていました。汽車は、だんだんその山の方に近づいていきました。そして、ある駅へ着いたときに、幸吉は、いままで乗ってきた汽車と別れて、ほかの客車へ乗り換えなければならなかつたのです。これから自分を乗せてゆく汽車は、もうちゃんとあちらで待つていました。形が旧式で色も古びていました。幸吉は、自分がだんだん都から離れてゆくという、さびしい気がしました。

その日の晩方、彼は、故郷の生まれた家へ帰つたのです。そして、幾年ぶりかで、お母さんのそばに床を敷いてもらつて寝ることができました。夜中に目をさまして、小便に起きました。

彼は、戸を開けて戸口に出ると、青さめた星晴れのした空は、忘れていた、なつかしい幼い日の物語をしてくれますので、しばらくその昔語りにつききとれて、じつと目をみはっていると、遠くで、

「ウオー、ワン、ワン。」という犬のほえ声（こゑ）がしました。

「ジャツクだ！」

幸吉（こうきち）は、こう叫（さけ）んだものの、ジャツクの声（こゑ）が、こんなところまできこえるはずのないことを悟（さと）りました。彼（かれ）は、泣（な）きたいような気持ち（きもち）がしました。ただ、あのとき、ジャツクを助（たす）けてやってよかつた（た）と独（ひと）り心（こころ）の中で満（まん）足（ぞく）して、また床（とこ）へ入（はい）って眠（ねむ）りました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 二」講談社

1977（昭和52）年9月10日

1983（昭和58）年1月19日第5刷

底本の親本：「未明童話 お話の木」竹村書房

1938（昭和13）年4月

初出：「お話の木」

1937（昭和12）年5月

※表題は底本では、「花《はな》の咲《さ》く前《まえ》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2016年12月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

花の咲く前

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>